

## 外国籍の児童がいる教室での授業を 教師用指導書でサポートします

明海大学外国語学部教授  
木山 三佳



近年、日本語を優勢言語としない外国籍等の児童の数が増えています。ここでは、そういう児童のことをJSL (Japanese as a Second Language) 児童と呼ぶこととします。日本語が母語の児童とJSL 児童がいる教室では、どのような配慮をしたらよいでしょう。

まず、JSL 児童の言語背景を知って、どのような日本語支援が必要な段階であるかを把握することです。認知的発達の上にあるJSL 児童の場合、母語が何語かだけでは、言語背景の一部しか見えません。

⇒開隆堂の教師用指導書では、JSL 児童の日本語習得に関わる要因についての解説を掲載します。

二つ目は、平易な日本語を使うことです。日本語母語の児童に対して有効な方法(例：擬音語を使う、和語に言い直すなど)が、日本での生活経験が少ないJSL 児童に必ずしも有効だとは限りません。

⇒開隆堂の教師用指導書では、表記、語彙、文法などの側面から、どのような表現が難しいのか、どうすれば平易な表現に言い換えられるのかを解説します。

三つ目は、イラストや写真などの視覚教材を利用したり、実物を用いたりすることで文脈からの支援を増やす方法です。文科省が提唱しているJSL カリキュラムでも学習内容をひき下げるのではなく、足場かけによって段階を踏んで理解へと導く方法が有効とされています。

⇒開隆堂の教師用指導書には、道具や素材の写真とひらがなで名称を書いた掲示用教材や、日本独自の行事・祭りについての各言語(七か国語)での解説があり、授業ですぐに使えます。

四つ目は、学習に対する動機づけを高めることです。異なる文化背景を持つJSL 児童の場合、その教科が何を学ぶものか、なぜ学ぶのか、今学習している単元の内容は何かを理解していないため学習意欲がわからない、ということも起こり得ます。

⇒開隆堂の教師用指導書には、その教科の意義や単元の学習内容を簡単な日本語で記述した説明と、その対訳(七か国語)を掲載します。

以上、開隆堂の教師用指導書でサポートする、JSL 児童と日本語母語の児童の両方の内容理解を高める授業づくりに役立つ四つの配慮をご紹介しました。

また、家庭科や図画工作科の教科書に掲載されているQRコードから参照できる各種の動画では、実習作業手順などを確認することができるため、JSL 児童の理解を助けるものとして有効です。是非、ご確認ください。